

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

薩摩切子の新たな未来 桜島形の香炉

鮫島 悦生 鹿兒島／薩摩切子師



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



1月17日、プレゼンテーションにて



エリア・コンサルティングでサポートメンバーの川又氏と

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりを挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー・高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティング



プレゼンテーションでプロダクトについて話す鮫島さん

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LEB WITH NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。鹿兒島県選出の匠、薩摩切子師の鮫島悦生さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

輝き引き出す 繊細なカット

薩摩切子は、無色透明のクリスタルガラスに色付きのガラスを溶着させ、繊細で美しいカットを施したもの。カットによって生まれる色のグラデーション「ぼかし」が特徴とされる。

江戸時代末期、薩摩藩の富国強兵・殖産興業のために進められた「集成館事業」の一環として生産され、大名同士の贈り物や、将軍家に嫁いだ篤姫の嫁入り道具として使われたとの記録が残る。明治初頭に途絶えたが、1985年に復刻が始まり、新たな伝統工芸品として人気を集めている。

鮫島さんは今回のプロジェクトで、薩摩切子の香炉作りに挑んだ。クリスタルガラスは熱に弱く、さらに香灰を入ると光が遮られてガラスの輝きが失われるため、ふた付きの香炉は切子では敬遠されてきたのだという。この世界

原点は「匠」の楽しめ

鮫島さんが勤める工房は、鹿兒島県北部・さつま町の山あい、川のせせらぎが聞こえる自然豊かな場所に建つ。薩摩切子の生産は、ガラス生地を作る「吹き師」と、カットを



繊細なカットで輝きを放つ薩摩切子

施す「切子師」による分業制。工房では、難しいとされてきた黒切子や新色「薩摩フラウン」を開発するなど意欲的な挑戦を続けながら、ガラスや大皿からアクセサリまでバリエーションに富んだ作品を生み出している。

鮫島さんは薩摩切子の持つ「演出力」に引かれてこの世界に入った。「誕生日や正月、結婚記念日などの晴れの日に、厳かに、大切に使う。驚くほどの高級品で戸惑いもあったが、それに見合う価値があって、使う人が心豊かになれる」

当初は「毎日が木工のように、天職だ」と思えるほど楽しく、無心でガラスに向かっていた。しかし経験を重ねて責

に飛び込んで13年、新たな挑戦が始まった。ジュエリーなどで使われるロジウムメッキ加工を施した底面板や、金属製の香灰カップを使うことで、「輝きを失わない」という課題は克服した。しかし、熱以上に鮫島さんを悩ませたのが、香炉内の酸素不足だった。

さまざまな種類の香灰を試す中で、途中で火が消えてし



噴煙を上げる桜島形の香炉「kirika」

まうものもある。どんな香灰を使っても機能しなければ意味がない。煙の吹き出し口に当たる上部の穴の大きさを変えるなど、試行錯誤を重ねてもなかなか解消には至らなかった。

それまで上部の穴にはばかり注目していたが、ふと視点を下部に変え、紙一枚ほどの隙間を作ってみたところ、しっかりと香灰が燃え尽きた。そ

こで、カット技法を応用して下部にごく小さな穴を施し、空気の通り道を確認。穴の数も6カ所が最適だと分かった。新しい空気を取り込むことで、酸素不足に加え、熱がこもる問題も一気に解決できた。

完成した香炉の形は、鹿兒島のシンボル、桜島がモチーフ。立ち上る煙は、火口から上がる噴煙に見立てた。超絶技巧によって細かいカットが施された「桜島」は、キラキラと輝きを放ち、漂う煙が落ち着きをもたらす。特別な時間を演出する逸品に仕上がった。



個性を放つ6色の香炉

任を伴う立場にもなり「匠工ではなく、仕事として回さなければならぬ」という思いが強くなっていったという。

今回のプロジェクトで、最初に考えたのは丸いつぼ形の香炉。しかし、サポートメンバーの川又俊明氏の提案によって「桜島の形」に変更した。「アンテナは張っているつもりだったけれど、山の中でいつの間にか感覚が固まっていたのかもしれない。都会の目に触れて、この世界に入ったころの遊び心を思い出した」

このプロジェクトに携わった数カ月、クリスタルガラスと向き合う日々が続いた。吹き師とも綿密な打ち合わせを繰り返し、冷凍庫に一晩入れる実験もした。ガラスは熱に弱いとされてきたが、急激な温度変化でなければ問題はなく「逆に香炉に向いているか

も」と感じたという。また、形もカットも同じなのに、色によっては作業手順を変える必要があることも分かった。ガラスの持つ魅力や奥深さを改めて認識した、刺激的な体験だった。

そして現在、新たな思いも芽生えている。薩摩切子は殿様の時代から高級な贈り物、献上品のイメージが強い。で



薩摩切子にカットを施す鮫島さん

もこれからは、自分のために買いたいと思えるような作品作りにも取り組みたい。鹿兒島では誰もが薩摩切子を持っている、ってなればうれしい」今年、明治維新から150年。新しい時代を切り開いた郷土の先人たちと同じように、薩摩切子の世界に新しい風を吹き込むための挑戦は続く。



鮫島 悦生
鹿兒島／薩摩切子職人

1978年鹿兒島県生まれ。1996年鹿兒島県立甲陵高等学校卒業。2004年薩摩びーどろ工芸株式会社入社。2014年「かごしまの新特産品コンクール」鹿兒島県特産品協会理事長賞受賞。薩摩切子のガラス生地の良さを引き出すカットデザインを模索しながら、作品作りに取り組んでいる。

